

## 令和 7 年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員長 古 田 純 也

【視察先】福岡県筑後市

【視察日程】令和 7 年10月 8 日（水） 9:30～11:00

【視察事項】ちっちゃな図書館奮戦中 『婚活から認知症まで地域の課題解決きっかけづくり』について

【視察目的】図書館を拠点とした地域課題解決の取組を学び、本市への応用可能性を探る

【視察内容と学び】

図書館に付加価値を付けていくサービス展開の取組

＊JA福岡と連携し花屋を応援する企画

＊市内連携事業として、図書館でストレッチ、健康講座、認知症カフェ

＊コロナ交付金での企画として、絵本プロジェクト、軽自動車の移動図書館

＊宅配サービス（地域の商店街と連携する）

＊「本de恋活」企画、出会ったカップルの前撮りの場提供

＊雑誌スポンサー制度で図書充実

＊いろんな本に『出会う』仕掛け（手作りガチャポン）

＊図書館ボランティアとの連携

【視察感想】

筑後市では、図書館を本を借りる場所ではなく、地域住民が気軽に集い、語り合い、学び合いができる場として機能していました。

非常に関心を持った取組として、雑誌スポンサー制度を用いて、企業や住民が主体的に関わる仕組みは、図書館への愛着や本への関心度が深まる可能性があるのではないかと感じました。

また婚活支援や認知症予防ができる図書館は全国でも、めずらしい取組だと思います。また施設に携わっている館長をはじめ、職員のみなさんの本に関する想いが非常に熱く伝わりました。図書館は地域の未来をつくる場所であることを実感しました。

【視察先】熊本県荒尾市

【視察日程】令和 7 年10月 8 日（水） 14:00～15:30

【視察事項】商業施設内への荒尾市図書館の移転整備について

【視察目的】官民連携による地域活性化の取組を学ぶ

【視察内容と学び】

移転整備の背景は、荒尾市図書館は昭和 4 8 年の開館以来、市唯一の図書館として多様な資料、情報、学習機会を提供してきましたが、以前の施設では将来にわたって地域や市民のニーズに応えいくことが難しくなっていました。

※旧図書館の課題

施設面：施設内が狭いため、蔵書・閲覧スペース、学習・キッズスペースが不足

利用面：利用者層に偏りがある中高生や若い世代が少ない

このような状況をふまえ、市民が生涯にわたり、学び続ける力の向上を目指すとともに、魅力あるまちづくりを推進することを目的にあらおシティモールへの荒尾市立図書館の移転整備を検討することとなったようです。

三者にて整備内容の協議が行われる

荒尾市：図書館部分の改装費や備品等の経費負担

荒尾シティプラン：図書館部分を含めた店内改装の施工等

紀伊國屋書店：新図書館の運営（指定管理者）書店の出店検討

#### 移転整備の効果

あらゆる世代の市民が学びを深める拠点として市民が気軽に集まることのできる知的コミュニティの場の創出ができた。

官民連携で整備することで、単独整備に比べ短期間で開館されたので、可能初期投資と維持管理に係る費用が抑制できた。

移転先のあらおシティモール全体の魅力が向上され、来店者の増加やテナント誘致につながった。

#### 【視察感想】

図書館・書店・カフェが一体となった空間は、単なる蔵書提供の場を超え、多世代が集う場として機能されていることを実感しました。

干潟をイメージした、ゆったりとした空間設計は、今まで見たこともない図書館の創りで、官民連携のなせる業だと実感しました。

#### 【視察先】熊本県天草市

【視察日程】令和7年10月9日（木） 10:45～12:00

【視察事項】地域支援事業（高齢者の自主活動 通いの場の推進）

【視察目的】高齢者の自主活動支援と介護予防を目的とした『通いの場』事業の実態を学び、網走市への応用可能性を探る

#### 【視察内容と学び】

天草市の現在の高齢化率は、日本全体の40年後の高齢化率とほぼ同じ、超高齢化の先進地域でした。要介護（要支援）認定者が増加すると、介護保険サービスを利用する人も増加し、保険者（天草市）が支払う介護給付費が高くなっていき、高齢者が負担する保険料も高額になる。サービス供給が追い付かなくなることが懸念される。

そこで、容易に通える範囲に、元気な人も虚弱な人も地域住民なら誰でも通える場を住民主体で実施できるような方策や支援体制について検討を重ねられ、健康づくりと孤立防止を目的とした取組でした。

現在（令和7年10月）の体制→通いの場は、181箇所で参加人数は2,113人

お寺の御堂や元食堂、自治公民館等の歩いて通える場所に地域の方々が集まって、市の薦める介護予防活動（体操等）を実施するもので、住民主体の活動でした。

通いの場に参加する高齢者の割合（月1回以上）を2025年までに8%とすることを目指され、実績としては、天草市は16.7%達成されていました。

取組の成果として、要支援認定者や虚弱高齢者の減少が現れたようです。よって介護保険料の減額にも繋がった素晴らしい事業を学ばせていただきました。

### 【視察感想】

住民主体の活動が中心なので、参加者同士のつながりも深まり通いの場を通じて、見守り活動や早期支援につながる情報が共有されていることが伝わりました。網走市では今後、町内会が解散傾向に進んでいるので、このような『通いの場』は高齢者の健康づくりだけではなく、地域の絆を育む場としても活用できると実感しました。

【視察先】 熊本県天草市御所浦町

【視察日程】 令和 7 年10月 9 日（木） 14:00～15:45

【視察事項】 恐竜の島博物館整備事業について

【視察目的】 地域資源の活用による観光振興、教育・学習機会の創出ならびに博物館施設の運営体制について学ぶ

### 【視察内容と学び】

日本で初めて恐竜の化石が発見された地域にある御所浦恐竜の島博物館は、鉄筋コンクリート 3 階建ての構造で令和 6 年 3 月 2 0 日にリニューアルオープンしました。

基本理念は

- ・『天草 1 億年の大地の記録』を学べる博物館
- ・『天草の自然に関する教育活動』の情報拠点
- ・『御所浦住民の交流』の場

として、来島者の満足度向上と、収益に繋がる持続可能な仕組みづくりを官民一体となり、受け入れ体制を構築されていました。

地元住民やボランティアの協力による運営が印象的でした。

学校との連携も進んでおり、理科教育や郷土学習の場として活用されておりました。恐竜の骨格標本や地層模型が分かりやすく展示されており、子どもから大人まで楽しめる博物館です。発掘体験は、実際の化石を探すことのできる貴重な機会で、教育的効果が高いと感じました。

### 【視察感想】

化石の発掘体験や展示を通じて、自然科学への関心を高める施設で、何度も通いたくなる感じがしました。網走市も郷土博物館、監獄博物館、モヨロ貝塚博物館といった施設に恵まれた環境にあるまちです。地域資源を活かした体験型学習や観光振興の可能性を探る上で大いに参考になりました。

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
副委員長 栗田 政 男

### 筑後市

#### ◎「ちっちゃな図書館奮戦中事業」について

筑後市は福岡県の南に位置し福岡市まで車で1時間、新幹線で25分という恵まれた交通インフラのある町でした。

人口4万8千人で、昭和29年に1町3村が合併して筑後市が誕生し、去年は市政施行70周年だったそうです。

今回の図書館事業は、図書館に付加価値を付けていくサービス展開についての調査でしたが、一人の主婦が子育てを通して本を読む子が自立（自律）していけるのでは？という考えから、多くのボランティアを経験して市立図書館の館長（市の職員）になり、10年間で貸し出し冊数が3倍、文部科学大臣表彰されるまでに成功した事例でした。

館長の一ノ瀬留美氏の熱意ももちろんですが、教育部局の連携と市の教育環境への考え方も進んでいると感じました。

図書館を通して、高齢者の集会・若いカップルの情報発信など市民の集いの場として活用することによって、本に親しんでもらう取組が成果につながったと感じました。

一人の主婦が本の大切さに気付き、こつこつと行動していくことで町の教育文化の向上に繋がっていると思いました。

### 荒尾市

#### ◎商業施設内への市立図書館移転整備事業

荒尾市は熊本県の西北に位置し、石炭産業を中心に発展した歴史があり、石炭から石油へのエネルギー転換により炭鉱の閉山等、産業構造が変化していったようで現在は人口4万8千人、熊本市のベッドタウンとしての機能もある地域ようです。

三井グリーンランドのレジャー施設に隣接した大型ショッピングセンター「あらおシティモール」の空き店舗スペースに市立図書館を移転整備した事例でした。

現地に着くと紀伊國屋書店が併設されており、指定管理者制度の運営に紀伊國屋書店も参加しているとのことで、まさに官民一体となる事例でした。広大な図書館スペースには本を読むだけでなく、寛げるスペース、イベントが開催できるスペース等も多くあり、人の集まるショッピングモールに一日中集う場所を提供し本に親しんでもらう相乗効果は、素晴らしいと感じました。

時代のステージは変わり、民間との連携は行政運営に不可欠になっています。網走市の図書館も利用者の低迷に苦慮しています。成功事例を参考にしていきたいものです。

筑後市・荒尾市の図書館事業について視察し、内容の違いはありましたが本を読むことの大切さと本に対する愛情を強く感じました。何より九州の教育水準の高さと行政が教育に於ける本の重要性を認識していると感じました。

## 天草市

### ◎高齢者の自主活動・通いの場の推進

### ◎恐竜の島博物館整備事業

天草市は熊本県の西にある多くの島々が点在する2市8町が平成の大合併により誕生した市です。

温暖な気候で、みかんなどの果実栽培や豊富な水産資源による漁業も盛んで、最近ではエビ等の養殖も行われているようです。人口7万5千人で高齢者の比率も高く、広く点在している集落の高齢者対策は必須であり、天草市では高齢者の通いの場の推進を行いました。高齢者が集まりいろいろな体験をしてもらうことによる認知症の予防・健康推進の成果について報告をいただきました。

総事業費358万円（令和3年度実績）の少ない予算で高齢者が自立して通いの場を作り運営し、行政がマンパワーでサポートしているこの事業は、どこの町でも苦労している高齢者対策の一つの指針となる事業だと思いました。

もう一つの事業の博物館リニューアル事業は、四方を海に囲まれた離島で船が唯一の交通手段である地域でしたが、多くの化石発見地で恐竜の化石も多く出土しているそうです。

天草市では観光振興と地域の博物館としての機能を両立した恐竜の博物館に10億円を投じて着手しました。昨年完成した施設も素晴らしいものでしたが、ただ見るだけではわからない細かい説明を伺っていると太古の恐竜の世界にいたようでした。船でしか行けない地域性と恐竜化石が出土している独自性を考えると、観光としての価値も今後上昇していくと感じました。

網走市も観光が今後の経済活性化の柱ではないかと思います。大変貴重な視察ができ、今後の網走に繋がりたいと思いました。

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員 金 兵 智 則

令和7年10月7日（火）～10日（金）

今回の視察研修に参加させていただき、他都市の先進事例を現地にて直に勉強ができる機会を無駄にしないように、また網走市の将来に役に立てられるように、少しでも何か持ち帰れるようにと取り組ませていただきました。

現地で対応していただいた皆様や、委員長・副委員長、委員の皆さま、事務局員のおかげもあり、有意義な時間を過ごせたと思っております。

下記に私なりに感じたことをまとめさせていただきました。

### 福岡県 筑後市

『ちっちゃな図書館奮戦中「婚活から認知症まで地域の課題解決きっかけづくり」について』

筑後市では多大な財政負担が生じる図書館建設ではなく、現状で可能な図書行政の充実を図るために、図書行政推進委員会を立ち上げ、その委員会でまとめた調査結果を市長へ答申をしたそうです。提言した内容は7項目にまとめられております。その中に図書室長、専門職員の配置というものがあり、平成18年に提言を踏まえて図書室長が置かれました。その方は、現在、図書館長をされており、今回の視察でも説明をしていただいた一ノ瀬様でした。館長は以前、佐賀市立図書館で勤務をされており、一方で母親という立場ではPTA活動や自治会活動、地域活動などを積極的に行っていたとの事でした。

筑後市立図書館のコンセプトは「生活（くらし）とともにある図書館」というもので、図書館は社会教育施設ですが、筑後市では社会共育施設ととらえ、市民と図書館が共に育っていくために、利用者を選ばず、「いつでも・どこでも・だれでも」公平なサービスをすることにより、地域力の底上げ、ひいては地域の活性化につながるよう運営を行っていくように取り組んでいるそうです。そのために、多くの人に触れていただけるよう積極的なPRと様々な取組を行っております。特に、コロナ禍では人が移動できないということがあったため、未就学世帯へドライブスルー方式で絵本を配布する事業や電子書籍の導入、軽トラックに本を積んで保育園や学童保育を巡回する移動図書館を行うこととなりました。また、図書館へ来られない方に対しては宅配サービスを行ったり、図書館に触れてもらう取組としては、図書館で認知症カフェや婚活イベントの開催、著名作家の講演会開催など、通常考える図書館事業の枠を超えた活動に本当に驚きました。また、困難であったことの一つにボランティアとの関係があったそうです。色々と考え方の違いなどもあったそうですが、それらを整理し、乗り越えボランティア数も増加傾向との事でした。

網走市もイベントを行っておりますし、電子図書を導入するなど取り組んできております。また、ブックスタート事業も早々に取り組まれております。中高生の学習の場として多くの生徒に活用されているということも分かりました。エコーセンター内にあることもあり、駐車場の心配などないと思います。しかし、今後どのような図書行政を行っていくのか見えない部分もありますのが、デジタルやAIの時代だからこそ、せっかくの図

書館や蔵書されている図書をより活用していただくための取組を行っていく必要性も感じております。そのためにはやはり筑後市の館長のように、外部から熱意のある方を採用するという方法が一番の近道であると感じることのできた、本当に熱のこもった視察でした。

## 熊本県 荒尾市

### 『商業施設内への荒尾市立図書館の移転整備について』

荒尾市は2022年に市街地に立地するゆめタウンシティモール、いわゆるショッピングセンター内へ移転をしました。それまでは、1973年に開館をした施設で、多様な資料・情報・学習機会を提供しておりましたが、施設内が狭かったため、蔵書・閲覧スペース、学習・キッズスペースが不足していたり、バリアフリーに対応できていないなどの課題や施設の老朽化が進行しておりました。利用者の面では、中高生や若い世代が少ないなど利用者層に偏りがあるなどの課題もあったそうです。その後、2019年にシティモールを経営している会社から紀伊國屋書店との連携について提案があり、紀伊國屋書店と図書館整備について協議を進めることとなり、開館に至りました。整備については、もちろん新たに整備するよりも費用が抑えられること、工期が短くなるといったメリットもあったそうです。

開館初年度の来館者数は、旧図書館の来館者数約4万人の7倍となる約28万人が来館。利用者層も依然と比べて小学生と30～40代が増え、子供と保護者のようなファミリーでの来館が増えた印象もあるとのこと。また、課題となっていた中高生も学習室を利用してくれるようになりました。図書館が中心部へ移転したことで、利便性が向上し、来館しやすくなった面もあるそうです。新たな取組については、紀伊國屋書店との連携で、作家や編集者の講演会やサイン会などを実施しました。その他にもシティモール内のテナントとのコラボレーションを行っているそうです。例えば、和装店と浴衣の着付け教室を開いたり、携帯ショップとスマホ教室を開催したりしましたが、多彩なイベントができるようになったこともショッピングセンターに移転した利点だそうです。また、シティモール側にもメリットがあり、図書館移転前と見比べて、シティモール来店者数の増加や、店舗数が移転前の約40店舗から60店舗へ増えたそうです。今後も、様々なイベントを行い集客を進めていくとともに、学習の場の提供、多世代の居場所づくり、SNSによる情報発信を進めながら、より利用しやすい図書館になるような取組を進めていきたいという想いが伝わる視察でした。

網走市が図書館事業において、同じような取組を行っていくということにはなりませんが、将来に向けた街づくりを進めていく中にこういった考え方を持つ必要性があることを感じました。

## 熊本県 天草市

### 『地域支援事業（高齢者の自主活動 通いの場の推進）について』

天草市は平成18年に2市8町が合併し発足いたしました。発足当時、約30%だった高齢化率が令和6年度末では43.3%となり旧10市町のうち8地域で50%を超える状況となっております。そのような状況の中で要支援認定者・要介護認定者や非認定で介護サービスを利用する虚弱高齢者のいずれも増加しました。どこの自治体でも同じように、認定者が増加すると、介護保険サービス利用者が増加し、保険者が支払う介護給付費が高くなって

いきます。そのため、合併当初から介護予防事業には取り組んでおりましたが、行政主導による中央型で短期集中型の教室が主なものでした。地域における自主的な介護予防活動が少ないため、機能改善しても卒業後に地域で活動を継続できる場所がなく再悪化するなどの課題がありました。介護予防ケアマネジメント上、まず地域の介護予防活動の場が必要と考え、サロンや公民館活動等の既存の活動で見えていた、虚弱高齢者が通える場が少ない、介護予防の効果を求めるには頻度が少ない、会場まで距離があり活動に参加できない高齢者が少ないといった課題をクリアするために、容易に通える範囲に元気な人も虚弱な人も地域住民ならだれでも通える場を住民主体で実施できるような方策を検討し、リハビリ専門職等と普及するメニューや専門職の支援体制について検討を重ねた結果、始まった事業が「通いの場」でした。

「通いの場」は登録制で、参加者の過半数が65歳以上。週1回以上開催。1回の参加人数はおおむね5人以上。市が薦める介護予防活動を実施することとしております。介護予防活動としては高知市が開発をした「いきいき百歳体操」等を推奨し、その他のメニューは自由だそうです。市からの支援は体操DVDの配布、DVDプレーヤーや血圧計等の貸与、リハビリ専門職による一回限りの現地支援、新たなメニューの提供等で金銭的な補助は一切ないそうです。平成27年度に25箇所から始まった通いの場ですが、ピーク時に192箇所となり令和6年度には182箇所となっています。参加者数は275人から一番多い時で2,615人、令和6年度で2,113人となっております。通いの場への参加率は、令和5年度で国が6.7%で熊本県が8.4%のところ天草市は16.7%と国の目標値である8.0%を大きく上回っている状況です。これらの取組によって、要支援認定者や虚弱高齢者の減少がみられ、介護保険料が前期に比べて100円減額となるなどの成果がみられました。今後の維持・拡大の取組としては天草市の就業人口で最も多い年齢層が65～69歳代のため、70歳代から社会参加につなげる仕組みづくりが必要になること。高齢者人口の減少に伴い通いの場も減少していくことが予測されているが、エビデンスのある介護予防活動メニューの検討や既存の地域活動の見える化を行い選択肢の幅を広げる必要があると考えられているそうです。

網走市もふれあいの家を長く行ってきているが、ボランティアの高齢化や移動が困難になる方が増えたことにより、実施をやめてしまったところもあると伺っています。天草氏が行っている「通いの場」は、自分たちで自分たちができることを行うといったコンセプトがあると感じています。そこに行政が少しだけお手伝いをしながら、みんなで元気に暮らしていくといったものだと感じた事業でした。このような事業を参考にしながら、網走市としても今までのものを少しずつ形を変えていかなければならない時期に来たのではないかと感じた視察でした。

## 熊本県 天草市

### 『恐竜の島博物館整備事業について』

天草市ではもう一か所、旧御所浦町にある御所浦恐竜の島博物館に伺いました。この施設は平成9年に御所浦に分布する白亜紀の地層から、恐竜化石や日本最大級の肉食恐竜の歯化石などが発見されたため、御所浦島開発総合センター内に御所浦白亜紀資料館が開設されました。平成26年に天草全域が天草ジオパークとして日本ジオパークの認定を受け、白亜紀資料館を拠点施設としてジオパーク活動を推進していましたが、展示スペースや活動の制約が多く、発展性や継続性が課題となっている状況を踏まえ、新たな天草ジオパークの情報拠点施設としてふさわしい機能を持った博物館として、また地域住民の交流拠点となるような機能を併せ持つ施設を整備するという計画が平成31年に策定がスタートしま

した。そして、令和6年3月20日に「天草1億年の大地の記録を学べる博物館」「天草の自然に関する教育活動の情報拠点」「御所浦住民の交流の場」という3つの基本理念を掲げた『御所浦恐竜の島博物館』がリニューアルオープンしました。

施設内も視察させていただきましたが、建設計画と展示計画のミスマッチが生まれないように入札時期を同時にしたり、コロナ禍でもオンラインを活用しながら細やかな打ち合わせをしたと伺ったように、大変興味深く拝見することができました。また、私たちが伺ったタイミングで小学生とすれ違いましたが、ちょうど理科の現地学習の最中に伺いました。教育委員会と連携をし、小学6年生全員（今年度は538名）を対象に博物館見学、化石採集体験、島一周クルージングというすべての行程を学芸員による解説を受ける授業を行うそうです。そして、説明をしていただいた3階部分は地域のコミュニティセンターとして地域住民の皆様に活用をいただいているそうです。さらに、令和7年9月20日からクレヨンしんちゃんとのコラボレーションが始まっており、小さな子供連れの家族が増えた印象があるとの事でした。

展示については学芸員である職員の方も関わっていたため、丁寧で熱量ある説明を受けることができました。また、開館1年が経過し展示の改善箇所が分かったため、年度内に約250万円の予算で展示改修を行う予定だそうです。また、市民からの要望に応えるために効果的な改善計画を構築中とのことでした。網走市にも博物館は何か所かありますし、加えて流水館もあります。網走市の流水館は5年を目途としたリニューアルを計画しております。博物館ではなく観光施設という位置づけなのだと思いますが、リニューアルには来館者と直接触れ合うスタッフの意見を参考にすることができるのではないかと感じました。さらに、意見を参考にしながら展示をしていくことにより、スタッフの熱量にも変化が生まれ、それが来館者に伝わっていくといった好循環が生まれてくるのではないかと感じた視察でした。

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員 里 見 哲 也

訪問先において視察して来た所感を報告します。各自治体が積極的に取り組む事業は、いずれも大変参考になるものであり、受け入れていただいた皆様に感謝申し上げます。

### 所 感

#### 1. 福岡県筑後市 ちっちな図書館奮闘中「婚活から認知症まで地域の課題解決きっかけづくり」

人口規模で1.5倍ほどの筑後市は、老朽化した「面積の小さな図書館」ながら、「配本サービス」や「学校図書館・中央公民館図書室」などと連携して、移動図書館を含め「プッシュ型」のサービスを行っている。いわく「入口は小さいけど、奥が深いのが図書館」だそうです。

コンセプトは「生活（くらし）とともにある図書館」で、市民の成長が地域力を底上げし、地域の活性化につながると目標をかげ、雑誌スポンサー制度なども活用して市の予算の低減を図りながら、市民に新鮮な情報提供に努めている。中でも「家族de絵本プロジェクト」はとても興味深い取組であり、「不思議な世界を冒険しよう」をテーマに絵本5冊を未就学児童世帯にドライブスルー方式で配布している。

また、図書館ボランティアとの連携による「ブックスタート（マンツーマン形式）」では、親子の関係づくりと「図書になじむ」きっかけづくりに「絵本」を有効活用しており、絵本の蔵書の豊富さに感動を覚えた。説明していただいた館長の言葉を借りれば「家に本のない家族向けに、その子にとって大切な1冊をめぐり合わせる」という、私見ですが「壮大な教育プロジェクト」の面を有しており、毎年の積み重ねにより「本に親しみを持つ市民が増加して行く」ことに大いに期待が持てると感じました。

2018年には文部科学大臣表彰（子どもの読書活動充実優秀図書館）を受賞しており、評価も高いが、これら一連の取組にはキーマンとして活動する職員の情熱が不可欠であるため、運営の難しさも感じつつ、図書館を通じたプッシュ型の教育としても、大変参考になる取組でした。

#### 2. 熊本県荒尾市 商業施設内への荒尾市立図書館の移転整備

ショッピングモール内に市立図書館を設置するという、斬新な取組みです。旧図書館の老朽化が進み市民が蔵書数も多い他の市の図書館も利用していたところ、ショッピングモールの運営会社から、紀伊國屋書店と連携する形で図書館を移転しないかという話があり、実現したものです。新しい図書館を建築するよりも、工事期間も費用も抑えられるし、モール自体も空き店舗スペースが進んでいたことから、相乗効果が期待できるなど、両方の課題を同時に解決できると考え、実現に至りました。

モールの周辺常況やファミリー層の来店、バス停があることによる滞留人口の利用者、売れ筋作家のサイン会実施やイベントが可能になったことなど、現況は良好です。視察前

は、私個人的には、網走市の場合で、4条商店街にサテライトの市の図書館として流用できないか？と考えていたのですが、同様の多面積のショッピングモールのような既往施設がないので、民業との連携による取組み部分を参考に視察させていただきました。人口減少がこれからも進む中で、行政運営の費用面で、民業のノウハウと有効に連携するという可能性について、一つの成功事例と感じ、網走市の今後の公共用施設のあり方の提案の参考にしたいと考えます。

### 3. 熊本県天草市 地域支援事業（高齢者の自主活動「通いの場」の推進）

熊本県で3番目の人口7万人強ながら、65歳以上の高齢化率が何と43.3%と、網走市の20年先を思わせる天草市の高齢者支援課の取組を視察しました。

要介護認定者が増加するとどうなるのか、保険者（天草市）が支払う介護給付費が高くなり、高齢者自身が負担する保険料が高額になる。また、少子高齢化の進展は、介護サービスの供給側の人手不足により、このままではサービスを利用できない状況になる。そこで、介護予防の推進のため「通いの場」をつくり、健康増進に取り組むための「いきいき百歳体操」や「脳トレ」ほか、歩いて通える「通いの場」の普及の状況を説明していただきました。行政だけで動かず、多職種を巻き込み、とことん普及啓発をすることで、なんと「通いの場」は182団体、利用者は2,113人で、虚弱高齢者数は減少している説明があり、いただいた資料を含め、当市での運営の参考に提案・活用したいと思います。

### 4. 熊本県天草市 「恐竜の島博物館整備事業」

天草市の御所浦支所エリアにある離島に設置された「恐竜の島」博物館は、天草の自然に関する教育活動の情報拠点として、地元の子供が誇れる施設を目指して令和6年3月にリニューアルオープンしました。天草1億年の大地の記録は、恐竜だけではなく、魚や貝類など、地域の歴史探求の場として「発掘体験」のできる施設です。これを地域資源として、観光振興の効果による経済効果なども視察してきました。

離島にあるため、水上タクシーの利用など受け入れのキャパシティには上限がありますが、地域住民にとってはコミュニティーセンターとしての利用スペースもあり、いわば

「学ぶ・稼ぐ・憩う」施設です。現在クレヨンしんちゃんとのコラボが実現し、家族連れの集客効果もあり、順調に運営している。

市としては、来島者の満足度向上と収益に繋がる持続可能な仕組みづくりに取り組んでおり、交通・宿泊・食事処など課題はあるものの、お土産の商品開発支援、島を巡るしかけづくり等、今後に期待できる状況であると感じました。民間のリゾート開発等事業ではなく、第三セクターのような事業でもなく、天草市の「博物館」という公共施設であることは、単純に営利事業でなく、地域にとって「身の丈に合った施設」であることを重視しており、地元の子供のリピーター利用も意識して、化石の発掘体験では、1回で1人5個までの発掘で、化石を見つけたら「永久無料パス」を発行するなど、地域に根ざした公共施設であることなど、参考になると感じました。

以上

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員 永 本 浩 子

### 1. ちっちゃな図書館奮戦中「婚活から認知症まで地域の課題解決きっかけづくり」について

＜視察日＞ 令和7年10月8日（水） 9:30～11:00

＜視察先＞ 福岡県筑後市 筑後市役所

＜視察内容＞

筑後市の市立図書館は県内最小の小さな図書館だが、「生活（くらし）とともにある図書館」をコンセプトに様々な企画を行っている。

コロナ交付金を活用した移動図書館「としょま〜る号」の整備や地域課題解決のきっかけづくり事業として、市内の他課と連携した「図書館で認知症カフェ」「図書館de体力チェック」や野菜等を届ける「ちくごいきいき宅配便」に加盟して来館が困難な障がい者や遠隔地に住む人に野菜と一緒に本を届ける宅配サービス、全国唯一の恋の神様「恋木神社」があることから、閉館後の図書館で好きな本の紹介やボードゲーム、1対1のトークタイムなどを行う婚活イベント「本de恋活」は毎回カップルが誕生、市民に新鮮な情報を提供するため市内企業にスポンサーになってもらう「雑誌スポンサー制度」などなど。

また、子どもたちが自分の好きな本だけでなく、楽しみながら色々な分野の本に出合うための「家族でチャレンジ！ガチャ本」や「図書館でボードゲーム」、4ヶ月検診の時に一組の親子に一人の図書館ボランティアの方が読み聞かせをしてくれる「ブックスタート」、この時、4ヶ月の赤ちゃんに図書利用カードを渡して、子どもたちが小さいころから本に親しむ環境づくりにも取り組んでいる。こうした取組の結果、子どもたちの図書利用が飛躍的に増加！また、子ども向けイベント等への取組が評価されて文部科学大臣賞を受賞！

市政施行70周年記念企画イベントには、絵本大賞を受賞した作家にも来てもらうことができた。これからも、市民に愛され、地域とともに成長していく図書館を目指し、図書館に付加価値を付けていく。

＜感想＞

今までの図書館のイメージを一新するような取組の数々でしたが、中でも「これはいい！」と思ったのは、「ガチャ本」の企画。段ボールやペットボトルを活用した手作りのガチャポンで、子どもも親もワクワクしながら新しい本と出会うことができる。更に、ビンゴで感想用紙をもらい、感想を書くと引き換えでボランティアさんが作った可愛いプレゼントがもらえる。期間中は何度でも挑戦することができ、あまりの人気で期間を延長したほど、とのことだった。こんな楽しい企画は、網走の図書館でも是非やってみてほしい。

また、ブックスタート事業は網走でもやっているが、本を渡すだけ。筑後市のように渡すだけでなく、親子にマンツーマンで読み聞かせを行う取組は、大変素晴らしいと思った。イギリスでは、思春期の非行を防ぐために0歳児から親子で絵本を読むと効果がある、と言われている、とのこと。また、親もこうやって読んであげれば良いのだ、と勉強になる。この取組はコロナ禍でもフードを付けて、場所も工夫してやり続けたそう。一番大変だったのは、ボランティアさんのモチベーションをいかに保つか！伸び伸びとやっ

ていただくのにとっても苦労した、と言われていたが、網走でも是非取り組んでももらいたいと思う。

様々な企画と挑戦の原動力になっているのが、今回、お話を伺った一ノ瀬留美館長。筑後市の隣、佐賀市の移動図書館の嘱託職員時代に3人の子育てをしながら、通信教育で図書館司書の資格を取得、子どもの通う小学校で読書会やジュニアサッカーチームを立ち上げるなど積極的に活動する中、2006年、筑後市中央公民館図書室長の募集に応募して図書室長になった。それから約20年、奮闘し続ける一ノ瀬館長の情熱と行動力に圧倒され、心から感動した視察となりました。

## 2. 「商業施設内への市立図書館の移設整備」について

＜視察日＞ 令和7年10月8日（水） 14:00～15:30

＜視察先＞ 福岡県荒尾市 荒尾図書館

＜視察内容＞

午前中の筑後市の「ちっちゃな図書館」に対して、午後視察した荒尾市の市立図書館は、商業施設内に作られた「広～い図書館」！

老朽化した市立図書館とオープンから20年、活気がなくなりテナントが入らず空きスペースが増えていた「ゆめタウンシティモール」。この二つの課題を一気に解決したのが、商業施設内に図書館を移転する、というアイデアだった！

紀伊國屋書店が指定管理者となり、「荒尾干潟」をコンセプトに海の中にいるような、おしゃれな図書館が誕生！新しい建物を一から建てるのではないので工期も短く、費用も抑えられた。

広々とした図書館内は、本を読むだけではなく、勉強をしたり、パソコンで作業をしたり、親子で楽しめたり、暑い日にはクーリングシェルターにもなるため、涼みに来る人も多く、本を借りるだけでなく、滞在型の図書館を目指している。

ゆめタウンシティモール内の様々なテナントとのコラボ企画も開催されており、紀伊國屋書店だからこそ呼べる有名作家や編集者の講演会やサイン会、和装店との浴衣の着付け教室、携帯ショップによるスマホ教室等々、人気を呼んでいる。

館内は蓋つきなら飲み物の持ち込みもOKなので、ドリンクホルダー付きのテーブルもあり、シティモール内のカフェでドリンクを買って図書館で飲みながら読書が楽しめる。また、移転を機にデジタルライブラリーを導入！画面に映し出された本の表紙にタッチするだけでQRコードが表示され、貸し出しができる。更に、市内の小中学生は図書館に行かなくても一人に1台配布されているタブレットから学校にいても読みたい本を借りることができる。

こうした様々な工夫で、高齢者が中心だった利用者層が、小学生や30～40代の利用者が増え、試験前には中高生で学習室はいっぱいになるほどに。来館者数も飛躍的に伸び、旧図書館の年間来館者数4万人に対して、オープン初年度の2022年は28万人！昨年も23万人と大きく増やすことができた。

＜感想＞

老朽化して建て替えを迫られていた図書館と空きスペースが埋まらずに困っていた商業施設、この二つの課題を今までにない発想で解決した荒尾図書館。そのアイデアは素晴らしいと思った。そして、シティモール内の各テナントとのコラボ企画や飲み物持ち込みOKでお互いにWin-Winの関係が出来ている。

また、全国初のデジタルライブラリーは、素晴らしい設備ですがその割に、まだあまり利用されていない。しかし、そのデジタルライブラリーのコーナーを使って、ドコモ、au、ソフトバンクの三社が交代でスマホ教室を開催し、中高年の方にも電子図書に触れてもらうというのも良いアイデアだと思う。図書館の入り口に設置されたセンサーで来館者数をカウントできる、ということにも驚いた。

そして、本を収納する本棚が地震で揺れると自動的に棚の奥が1段下がって本が床に落ちない工夫が施されており、熊本地震を経験したからこそその素晴らしい知恵だと感心した。シティモール内には市の出先機関も入っており、図書館が市の中心部に移転したことで、利便性が向上し、来店者が増え、シティモール内の店舗の売り上げも向上、空きスペースが埋まらずに困っていたのにテナントの誘致にもつながっているという。また、かつては荒尾図書館よりも広くて蔵書数の多い近隣自治体の図書館に行く市民が多かったようだが、今は反対に市外・県外からも利用者が来るようになり、図書館の移転が地域の活性化にも結びついている。

網走市の図書館とは全く違うスタイルで、商業施設があり、そこに紀伊國屋書店が入っていたからこそできた、という要因も多いため、そのまま網走に取り入れることはできないが、ゆっくりくつろげるための工夫や親子で読み聞かせを楽しめるスペース、図書館とイベントのコラボ、タブレットを活用した子どもたちへの電子書籍の貸し出しなど、参考にできればと思った。

### 3. 「高齢者の自主活動 通いの場の推進」について

＜視察日＞ 令和7年10月9日（木） 10:45～12:00

＜視察先＞ 熊本県天草市 天草市役所

＜視察内容＞

天草市は平成18年に2市8町が合併し、離島も含め県内最大の面積（683.82km<sup>2</sup>）となる一方で、高齢化率は43.3%、地域によっては57.3%と非常に高く、天草市の現在の高齢化率は、日本の40年後の高齢化率とほぼ同じという状況。このままでは、いずれ介護サービスの供給が追いつかなくなることから、平成27年から歩いて通える住民主体の「通いの場」づくりをスタートした。

「通いの場」の登録要件は

○参加者の過半数が65歳以上

○週1回以上開催

○参加人数はおおむね5人以上

○市が薦める「いきいき百歳体操」等とその他メニューは自由（脳トレ、お手玉、昼食会、移動販売車で買い物など）

市の支援は、体操のDVD配布やDVDプレーヤー、血圧計の貸与、リハビリ専門職による現地支援などだけで、住民が主体となって公民館やお寺などを会場に、現在、182箇所、2,113名が参加して活動している。

拡大のポイントは3点！

行政だけが動くのではなくリハビリ等の専門職など多職種を巻き込み、専門職に依存しすぎない頻度で住民の意欲を上げてもらう。

とことん普及啓発！あらゆる機会に現状・課題・「通いの場」の取組紹介を行い意識と意欲に働きかける！コロナ禍前は年間5千人に啓発！住民による口コミ・お誘いが最高のPR！

脳いきいきサポーターの養成！必要性を感じたサポーターが通いの場を立ち上げた例も多い。「脳いきいきサポーター」養成講座⇒（株）Re学に委託して、NHKにも出演している理学療法士・川畑智先生による認知症予防講座（全8回、2週に1回、4か月）を受講したサポーターのうち7割が地域活動を実践！「通いの場」の8割に脳いきいきサポーターが在籍しており、その数はなんと556人に！

平成29年には、健康寿命をのばそう！アワードで厚生労働大臣賞を受賞！数字の上でも要支援認定者や虚弱高齢者が確実に減っており、介護保険料も値下げとなった。

#### <感想>

天草市は、市主体ではなく、住民が主体となって活動を進めており、182箇所にまで広がっていることに本当に驚いた。網走市にも市民自らが立ち上げてボランティアで運営されている「高齢者ふれあいの家」があるが、その数は市内で13箇所だ。人口的には網走市の2.3倍の天草市が、どうやって182箇所にまで拡げることができたのか、興味津々だった。

「通いの場」拡大のポイントをお聞きし、あらゆる機会に啓発を行い、自らの介護予防の必要性和住民同士で支え合う地域づくりの必要性を訴え、そのどちらも適えられるのが「通いの場」！という「とことん普及啓発」の取組が、結果に結びついたのだと知った。住民による口コミ・お誘いが最高のPR！となるまでの粘り強い取組の成果だと思う。

また、認知症予防の担い手として「脳いきいきサポーター」の養成も非常に大きな効果をあげている。網走市でも「認知症サポーター」の養成は行っているが、市内開業医の講習を一度受ければサポーターになれるのに対して、天草市は委託契約を結んでいる著名な理学療法士の講習を全8回4か月にわたって受講し、認知症についての知見のみならず、パズルやカードなどを使った認知症予防ツールについても学ぶため、終了後は「通いの場」や「いきいきサロン」「老人会」などで活躍をしている。

更に、高知市が開発した「いきいき百歳体操」を「通いの場」で実践することを推奨しており、一人ではなかなか立てず、歩くのも大変だった96歳の女性が、この体操を週2回3か月実施したところ、スタスタ歩けるようになった動画には、本当にビックリした！タイムも実施前は27.3秒、実施後は13秒と確実に早くなっている。

数字の上でも、高齢化は進んでいるのに介護度も介護保険料も下がっている。何よりも、参加者が楽しく、いきいきしているのが素晴らしいと思った。

網走市も「ふれあいの家」をはじめ、「ふまねっと」など各種運動教室の開催、市民健康プールを活用した事業、ノルディックウォーキングなどの取組、あばしりカニチョッ筋体操の普及にも取り組んでいる。また、認知症サポーターや健康コンシェルジュ匠などの人材育成も行っている。しかし、それぞれがバラバラで、人材も天草市のように活かされていないのが現状だ。網走市の高齢化率は31.6%（令和2年時点）と天草市ほど高くはなく、健康寿命も全国平均よりは良い状態だが、今後の超高齢社会を考えると、こうした取組と人材をもっと活用し、より多くの市民の健康寿命延伸に繋げていけるよう、取り組んで行くことが大切だと考える。そして、行政主導から住民主体に持っていけるよう、今回の視察をしっかりと活かしていきたいと思う。

#### 4. 「恐竜の島博物館整備事業」について

<視察日> 令和7年10月9日（木） 14:00～15:45

<視察先> 熊本県天草市 天草市立御所浦恐竜の島博物館

## ＜視察内容＞

天草市の離島である御所浦町は白亜紀の地層が多く分布しており、恐竜化石の発見地として知られている。昭和63年に開館した「御所浦白亜紀資料館」が、令和6年3月に「御所浦恐竜の島博物館」としてリニューアルオープンした。老朽化した展示施設の更新と観光誘客を目的として天草市が実施したもので、国の地域活性化交付金を活用して整備された。一方、整備に伴い、多くの来島者が見込まれることから、島民としては何をすればいいのか、何度も話し合いを重ね、交通手段、食事、宿泊、おもてなし、お土産品など、地域住民と行政と事業者の官民一体となった受け入れ体制の構築が図られた。また、博物館への来館者に島を巡ってもらうための「島内周遊プラン」「化石採集クルージング」「釣りプラン」「AIを活用した化石認証アプリ」など島全体を「まるごとミュージアム」とした様々なプランが作られた。こうした取組もあり、白亜紀資料館の時は年間1万人以下だった来館者が、令和6年度は2万8千人と約3倍になった。インバウンドも年間10名ほどだったが、今は年間100名を超えており、確実に増えている。しかし、フェリーによる車両の積み残しなどが発生し、課題も浮き彫りになってきており、検討会議を定期的開催している。更に、熊本県の「クレヨンしんちゃん家族都市協定」を活用して、視察直前の9月20日には、クレヨンしんちゃんを博物館の応援隊長に任命する任命式を行い、コラボレーション事業がスタートした。

教育・学習支援としては大きく分けて二つあり、一つは天草市教育委員会と連携・実施する小学校理科授業『地球の歴史探求学』及び各学校から依頼される総合学習。もう一つは天草自然資源活用推進連絡会による事業「海にうかぶ博物館 あまくさ」の教育支援活動。

『地球の歴史探求学』は市内の小学校6年生全員（令和7年度は538名）が博物館を訪れ、館内見学と化石採集体験、島1周クルージングまで全ての行程を学芸員による解説を受ける授業。

『海にうかぶ博物館 あまくさ』の教育支援は、地層や化石について学習する高学年を中心に、自然に関する野外授業や教室と野外見学地での解説を学芸員が行うもの。

学術研究は、大学や他の博物館と調査・研究を通じて学術論文の執筆や記者発表を行っている。スーパーサイエンスハイスクールの指定を受けている天草高校には、地層や化石の現地指導や学術支援等を行っている。

## ＜感想＞

リニューアル整備によって、従来の学術展示中心の資料館から、教育と観光を融合させ、更に島全体に拡げた体験型施設へと発展させられたのだと思う。また、人気アニメ「クレヨンしんちゃん」とのコラボで、スタンプラリーやオリジナルグッズの販売を展開、子どもや家族連れにも親しみやすい企画が成功し、SNS等で話題となっている。広報、観光面でも高い効果をあげているのではないかなと思われる。

教育の面でも、市内の小学校6年生全員が授業として来館し、展示物の解説や化石採集体験などを学芸員の指導のもとで受けられるのは、素晴らしい取組だと思う。そして化石の採集だけでなく、クルージングもできる！子どもたちにとって、本当にかげがえのない経験になると思う。また、採集した化石は子どもたちが持って帰ることができ、貴重な化石を採集した場合は、その化石を寄贈してもらう代わりに、死ぬまで一生無料で入館できる「入館証」をいただけるというのも、とても良い企画だと思う。市内の子どもは、高校生まで無料というのも素晴らしい。

また、館内の展示物の内容の凄さに驚いた。恐竜の代表ともいえる「ティラノサウルス」の全身骨格が3体そろっているのはこの博物館だけだという。発見者の姓にちなんでつけられた愛称「スタン」「ワイレックス」「ジェーン」の3体が並んでいるのは圧巻

だった。また、整備工事の際に発見された大型の魚化石が新種として認められ「アマクサゴシヨウラムカシウオ」と命名されるなど、豊富な展示内容に子どもから大人までワクワクさせられるのではないかと。今後は「夜の博物館（ナイトミュージアム）」も企画しているという。

今回、「恐竜の島博物館」に行くのに、初めて海上タクシーに乗ったが、歩いて渡れない離島だからこそ、天草にはまだまだ化石発掘未開の地がたくさんあるという。こうした地域固有の資源を「体験」「学び」「発信」の場として整備し、地域の住民や教育機関が一体となって運営する取組は、網走市にも生かすことが出来るのではないかと。当市のモヨロ貝塚なども貴重な地域固有の資源であり、更なる魅力の創出と教育との連動などに繋がっていただければと感じた。

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員 平 賀 貴 幸

○10月8日① ちっちゃな図書館奮戦中「婚活から認知症まで地域の課題解決きっかけづくり」について

視察場所：筑後市役所及び図書館

筑後市は合併をしていないコンパクトな街で「恋のくに ひと想うまち筑後」のキャッチフレーズでまちづくりを進めている。

この日、一ノ瀬筑後市立図書館長から説明を受ける。館長は専業主婦からスタートし、子育ての経験から絵本と出会い、地域活動やPTA活動から始まり、図書館で地域課題解決ができることに気がついたとのこと。

図書館のパートから嘱託職員をへて現職になっている。

2006年に7つの提言を市長に対して実施し、専門職員が必要なこと、図書の鮮度の問題を解決できる予算措置、ボランティアの育成、郷土資料などを保存する閉架図書の大切さ、図書館システムの充実整備、学校図書館への配本サービス充実、図書館の出入り口や子どものスペース確保など施設の改善、図書利用の拡大のためのボランティアとの連携やPRの充実と開館時間などの利便性向上、学校図書館との連携促進などを提言し、現在に至っている。

図書館学の5法則は公共図書館や学校図書館など全てに通じるもの。

公共性、公平性、書架経営、利用者本人が本に辿り着ける工夫、図書館は利用者のニーズに応じて変化し続ける事が重要になる。

これを守る事が大切で、コロナ禍でもこれを基本に運営を続けたとのことだった。

筑後市立図書館のコンセプトは「生活(くらし)とともにある図書館」となっている。

筑後市立図書館も以前は本も少なく、古い本が多く利用者も少なく苦情もあった。

公共図書館は社会教育施設であり、公教育の場であるから、図書館司書も課題解決に取り組みながら能力を向上させ、市民の利便性も向上させる事で地域の課題解決にも繋げることが必要になる。

税の還元率が高いのが公共図書館。いつでも誰でも公平に使えるのが大切。児童書は当初から充実していたが、一般書は古く使えない本が多く、数年かけて本の入れ替えを行うことから始めた。

レファレンスサービスが図書館では大切で、現在図書館にない本でも予約することで読むことができることを知らない市民も多い。

図書館にない本は購入するし、古くて手に入りにくい本は国立国会図書館を含めて他の図書館から借り入れる事で対応することができる。

これまでもレファレンスサービスに力を入れて来た。これは市民の方に知ってもらう事が大切で、これで市民のニーズを探ることにもつながるため重要となる。

また、コロナ禍でインターネット予約サービスを実施する際、在架予約サービスを実施している。図書館での滞在時間を短くすることを考えてスタートさせたが、2週間で前年度のインターネット予約冊数1500冊を超える結果になった。

このことから、この取組が大変好評なのがわかり、現在は75%ほどがインターネット予約で本を貸し出している。結果的に市民のインターネットのスキルも上がることになったと感じている。

コロナ禍での交付金を活用して絵本を未就学児に5冊ドライブスルー方式で配布する取組を実施し、手応えを感じた。

移動図書館車両「としよま〜る号」も導入した。幼稚園や保育園、コミセン、学童保育への巡回、隔週で行司などのPRにも活用できた。

コロナ禍で花が売れないため、図書館で花を飾る取組を進めることで、新しいニーズや話題の発掘に繋がった。

こうした取組で8.7万冊ほど貸出数も伸びている。

地域の課題解決きっかけづくり事業として、各課と連携して「ストレッチ」「体力＆フレイルチェック」「認知症カフェ」など様々な取組も実施している。

認知症カフェは、九州厚生局の地域包括ケア地域共生取組事例サイトでも紹介されている。

本の宅配サービスは、民間の取組である「ちくごいきいき宅配便」に図書館そのものが加入することで実施。来館困難者の本の利用を進めるために取り組んでいる。

このいきいき宅配便への図書館加入は宅配便の信頼度UPにつながることもあり歓迎された。

お弁当や生鮮品と共に本が届く取組。来館困難者への対応策でもあると同時に体調が回復し、図書館に再び通うことを目標に取り組むきっかけにもなる。公平性を保つためにも役立つものとなっている。

「本de恋活」は年に1回から2回閉館後の図書館で行う。閉館後の図書館で実施し、成婚した場合は前撮りや挙式の会場に利用可能となる。

成功したのは3組程度だが好評な取組である。

7：7で行うが、応募が多く漏れる人が多い。読書会を選から漏れた人に案内することで若い世代の来館促進にも繋げている。

こうした取組のイベントスポンサーもつくようになった。

特に雑誌スポンサー制度は1年分の雑誌代金を企業にしてもらい、図書館の雑誌の裏に企業広告を出してもらう取組。雑誌の配置を増やすために取り組み、50誌ほどにスポンサーがついている。契約がされるために努力している。係長と共にお礼と継続依頼を確実に進めている。

2月に雑誌付録をプレゼントするイベントを実施することで市民に還元する仕組みを進め、来館者が少なかった1月から3月の本の貸し出しが増えた。

てづくりガチャポンで子どもが様々な本に出会う仕組みを導入し、好評を得ており、年に1度実施している。

図書館ボランティアとの連携は様々な取組んでおり、ブックスタートには特に力を入れている。アタッチメントの形成による非行防止に繋がる。1組の親子とボランティアがマンツーマンで行う取組が全国からも評価されている。

この際に利用カードもプレゼントすることで、コロナ禍で小学生の利用が伸びることに繋がった。

読書習慣には各ボランティアの協力で絵本カーニバルを実施。11のボランティア団体が2か月にわたり、工夫を凝らした絵本の展示を楽しみながら進めている。

ボランティアは団体様以外にも個人でも受け入れており、取り組んでもらっている。

市政70周年記念イベントでは図書館でも様々な取組を行い、来館者増に繋げて来た。

スポーツ選手権（ラグビーなど）の推し本を展示することで、チームを応援しながらファンを呼び込む取組を実施している。

こうした取組の積み重ねで本の貸し出しは3倍を超えることになった。AI時代だからこそ想像力をはぐくむためにファンタジーの世界、絵本に触れる事が大切になる。

新聞掲載数も増える事で首長の認識も高まる。

平成18年にたちあがった筑後市図書館行政推進委員会は、筑後市立図書館建て替えが財政などの問題から頓挫したことを受けた市民の不満に応えるため設置されたもの。

この時の提言が原点になっており、この提言の結果で一ノ瀬館長が着任したことから筑後市立図書館の取組は始まった。

ボランティアとの関係性の構築は3・4年はかかった。当初は1人1人に連絡する必要があったが今は代表者に連絡することで対応できるようになり、ボランティアさんも「やってあげている」ではなくて、「機会をくれてありがとう」というような感じでボランティアに取り組んでくださっている。ストレスなくボランティア活動にも取り組んでくださっており、職員との関係も良好になっている。

考察：職員の確かな知識と信念に基づいた運営が図書館をまちづくりの拠点たらしめている。網走市の図書館で同様の取組を進めることは容易なことではないが、できることから取り入れていくことが必要と感じる事例であった。

## ○10月8日② 商業施設内への荒尾市立図書館の移転整備について

視察場所：熊本県荒尾市立図書館

説明は原口生涯学習課課長と馬場課長補佐。

荒尾市立図書館は令和4年4月に現在の場所に移転し今年で4年目になる。利用者数は1年目より2年目は減少したものの、その後は増加傾向となっている。

同図書館は商業施設内にあり、書店と図書館とカフェが一体的にあるのも特徴となっている。「荒尾干潟のようにゆったりと過ごせること」をコンセプトにつくられている。

図書館は昭和48年にオープンした海沿いの施設から現在の商業施設に移転。商業施設は元々は三井三池炭鉱の社宅跡地だった場所に平成9年に設置された。

郊外地区への店舗整備が進む中で空き店舗なども発生している状況の商業施設であったため、その対応策として書店の設置と荒尾市立図書館の移転などが令和元年から協議されはじめ、令和2年11月には「荒尾市立図書館の室の向上とあらおシティモールの活性化に関する連携協定」を締結。

商業施設の整備は権利者が行い、そこには荒尾市市立図書館の整備分の負担金を支払う形で取り組んで来た。

議会への対応はそれぞれの段階で補正予算を組む形で提案して来た。

議会もシティモールの活性化と老朽化した図書館の移転には理解があり、スムーズに議決された。子育て世代や若い世代へのアンケートをもとにして整備。約7億円の費用。1万冊の本を購入。

Wi-Fiや施設整備などを進める。

指定管理者は紀伊國屋書店となっている。

指定管理は10年間で1億／年

図書の購入は1500万円／年

電子書籍購入費600万／年

座席数は4倍に。夜も20時まで営業できるようになった。

考察：商業施設内の空き店舗対策も兼ねての図書館移転が、商業施設の再構築に繋がると共に図書館利用増加にも寄与している工事例。網走市の図書館とは立地条件などが違うため同様の取り組みを進めることは困難であるが、将来的な可能性を感じるものがあった。

○10月9日①地域支援事業(高齢者の自主活動 通いの場の推進)について  
視察場所:天草市役所

熊本県天草市は平成18年3月に合併し現在は7.1万人ほどの人口。

若年層の減少率が高く、高齢化率は43.3%となっている。

これは日本の40年後の高齢化率とほぼ同じ高齢化率で、後期高齢者以降の増加が今後も見込まれる。

要介護認定者が緩やかに減っていることも天草市の特徴で、介護予防が効果を発揮していることが数字からも読み取れる。

天草市としては、要介護認定者が増えると介護保険の市民負担も増すので、適切な方向性で施策は進めていると考えているが、それでも令和22年には7,956円の負担になると見込んでいる。

また、今後サービスの供給量は増えないがサービス対象の年齢層は増えるので、元気な高齢者を増やすことでこの課題に対応するとともに、専門職以外の担い手確保に力を入れることとしている。

平成26年度までは介護予防の取組をしても卒業後の地域での介護予防の場がなかったため、その創出に取り組んだ。

虚弱高齢者が通え、会場までの距離が少ない場所を作ることをコンセプトにした。「通いの場」の登録団体募集を平成27年から実施。

「週1回以上の取組をすること。」「いきいき100歳体操を行うこと。」これ以外は基本自由。

金銭的な運営支援は行っていないが必要なニーズは聴き取り、機材や用具の協力などは進めている。

通いの場の参加率も国目標や県の目標値を上回る状況にある。平成27年度から通いの場の設置ははじめそこから広げている。

考察：通いの場の設置箇所が非常に多く、担い手の育成も同時に進めているのが特徴的で、担い手が少なくなっても近隣の通いの場がそれを補完できるほどのきめ細かい地域での実施が見られた。これほどの箇所での実施は人材育成の努力と密接不可分であり、網走市の「高齢者ふれあいの家」を発展的に見直す必要性を感じた。

○10月9日②御所浦恐竜の島博物館整備事業について  
視察場所:恐竜の島博物館

恐竜の博物館は天草市の諸島部である御所浦にある施設。

2000点ほどの地域で見つかった化石などを生育環境ごとに展示。大型の複製骨格も展示している。

天草地域は恐竜の化石が多く発見される地域で、地域の魅力を伝え子どもたちが地域の誇りと感じられるように取り組んでいる。

現在、常設展に加えてティラノサウルスの特別展を行うとともにクレヨンしんちゃんを今年度末まで応援大使としてコラボレーションしている。

前身は白秋資料館で、合併前にも博物館設置の計画はあったが市町村合併で一旦事業はストップしたが令和6年3月にリニューアルオープンした。

「天草1億年の大地の記録を学べる博物館」「天草の自然に関する教育活動の情報拠点」「御所浦住民の交流の場」が基本理念となっている。

開業から9月末で来館者は38041人となっており、前進の白亜紀資料館の3倍の来場を得ている。

平日の来館は少ないが、土日や連休の利用は多い。

開館当初の令和6年の年間の目標は3.7万人だったが酷暑の影響で2.8万人の来館だった。

お盆やゴールデンウィークにはフェリーが不足するほどの状況があり、対策会議を地域を含めて開催しなくてはならない程であった。

秋や冬の閑散期の対策としては学芸員による「まるごと博物館解説」や「特別展ガイドツアー」などを開催し、わかりやすい周知と参加しやすい時間帯に実施することで盛況を得ている。

博物館に来てそれで終わりではなく、御所浦の各地を巡ったり島巡りツアーにつながるようにするなど工夫してしている。

地域の経済効果としては食事の場所が少ないことが課題になっていたが、物産館内に食の提供ブースができた日や限定のショップが開設されるなどして対応できるできるようになり、新たな産業へと繋がっていく動きが少しずつ出ている。

宿泊への影響も多くなっており、R5の白亜紀館時代と比べると大幅に増えている。

来館者のインバウンドも増えているが属性は把握できていない。グループで様々な目的を持って来館している。

香港や台湾のメディアの取材や紹介もある。

博物以外にも観光コンテンツとしては手漕ぎの船「伝馬船」の体験や、船でしか体験できないこと、島でのトレッキングなどがある。

博物館開設に向けては地域住民と行政、事業者がかなりの回数の意見交換を行い、現場の分析や入り込み客数の見込みや限界を把握することで現実的な路線を共有した。

他にも島内での移動手段や本土に戻る手段、宿泊のキャパシティについて、飲食の現場、お土産の現状なども話し合い解決へと繋げるべく打ち合わせをした。

しかし数値だけで人を動かすのは難しく、実際に来館してから急速に進んだ。

クレヨンしんちゃんとの連携は恐竜をテーマにした映画があったことや、しんちゃんの家族都市協定があったことから実現。あくまでも博物館の応援となっており、9/20に任命。効果が出るのはこれからだがその日は270人の来場があり、若年層と両親の来場が増えたことから効果は見込んでいる。

会館1周年のティラノサウルス展は知名度も高く交換は高い。

3200万円の予算に対して4200万円の経済効果を見込んでいる。

教育関係は周辺自治体とも連携しており、周辺の自治体にも授業のために学芸員を派遣するなどして連携している。

学習支援のための予算もあり、申請があると現地に行くまでの事前開設や交通費負担、現地でこの学習支援が受けられる仕組みがある。

天草はまだまだ船でしか行けない化石発掘可能地点が多くあり、高校や大学などとも連携しながら取り組んでいる。

平成29年には議会から身の丈にあった施設整備をとの話があり、御所浦地域の交流の拠点としての機能が持てるように地域の声を伺いながら丁寧に進めた。

コロナ禍で建設費は高騰し、予算も当初の10億円を超えることになったが議会への説明を尽くして理解を得た。

展示事業者と行政側の意思の疎通がうまくできたことも良い施設ができた原因。コストダウンのために什器を減らし、省エネ設計のBELS ZEB認証を受けた。

1年後の展示改修も250万ほどの予算措置で実施し更なる向上を目指している。

特別展の他にも「夜の博物館のモニターツアー」にも取り組み始めている。これは地元の中学生在が中心となってみる場所などについて考えている。

考察：博物館に地域の交流機能を組み込むと共に博物館を中心とした地域活性化策を多くの地域住民の協力で進めている事例は大変学びの多いものであった。核となる施設を中心に地域住民が力を合わせる姿は、網走市でいえば各地域のコミュニティセンターなどに該当する。

網走市でもコミュニティセンターなどの施設をどのように活用すれば地域が元気になるのかという視点で地域を見直す必要性を感じる学びとなった。

## 令和7年度文教民生委員会視察報告書

網走市議会文教民生委員会  
委員 古 都 宣 裕

文教民生委員会 視察 10月7日～10日 ※各資料は別参照

### 福岡県筑後市

事業名 図書館に付加価値をつけていくサービス展開

#### 事業内容

生活と共にある図書館をコンセプトに、市民に役立つ図書館を目指し、市民ボランティアや庁内各課と連携し地位づくりの拠点となる。

#### 説明メモ

婚活から認知症まで地域の課題解決きかけづくり **事業費 単年6万**

7つの提言を元に創意工夫

図書館の5法則

コンセプト 生活とともにある図書館

個々の課題解決→自己実現（図書館で情報を得て行動）につなげる

**レファレンスサービス（予約）**

ある本 まだ未購入の本 古くて無い本なども県内や国会図書館を通じて借りてくれる

図書館でストレッチや高血圧や糖尿病の講座

留学講座・職業講座など色々な講座をつくってやっている

認知症カフェなど

宅配サービス この部分を **6万**でやっている。

地域の宅配サービスの中に図書館の本も1つになっている

本de婚活 閉館後の図書館を使った婚活 年1～2回 図書館で結婚式の前撮り

応募が多くて7対7に漏れる 漏れた人を対象に読書会のお誘い

雑誌スポンサー制度

年間の雑誌の購入費を持ってもらう。その代わり外帯を作り裏側にスポンサーの広告を出す。※アイディアである 50雑誌がある 年3回広告変化可能

雑誌付録を利用が減る2～3月にプレゼント企画などで活用 2～3か月分

1日1票などで 人気の付録などを目当てに通われるなど

ブックスタート ボランティアとマンツーマンで 2冊渡す

生まれた子の図書館利用カードも渡す。※6年利用無いと消える

これにより、小学生の貸し出し利用数が増えている

ボランティアさん してあげている感があった

当時の課長が理解してくれてサポートしてくれた

地域にとって図書 自分が生きがいを感じているボランティアを育てよう

3年でボランティアの土壌を作っている

ボランティアの代表を変えている 誰でも回せる環境を作る

職員の引継ぎ育成もしながらやっている

## 印象と特徴

図書館長の創意工夫と熱意でもって底上げした典型的なマンパワーの事例。

如何に図書館・図書に繋げていくか。どんなことも基本的に、どの様に利用を上げるかどうやったら来てくれるか。

ボランティアなどの集まりも活発で印象的。ボランティアはやってやっている感があったのを意識改革して再編するところから始まっている。

図書を利用してもらうための作り方。基本姿勢が違うと認識した。

話を聞く限り予算を使うのが前提ではなく、創意工夫が先にあり、結果として予算を取りに行くための企画書などをつくり予算がつく。

展示やスポーツの応援。スポーツチームとの連携など。

図書館長が就任されてから如実に利用冊数が上がっている。

如何に自分に合った1冊に出会わせてあげるかというのを念頭に仕事をされている。

## 網走への活用と方向性

図書館長を現在の市職員からではなく図書館司書などから選び、図書に特化した方が長期にいる形にした方がよいと認識した。

図書に対する熱意というのが大切で普段の事であっても、すべての事をどうやって図書に繋げるかという視点で見ている。

網走市ですぐに取り組めるのは同じくブックスタートをやっているのだが、ボランティアによる4か月検診時に差し上げる本の読み聞かせを1対1で行っている。ボランティアの育成や協力が不可欠でマンパワーに頼らなくてはならないが、網走市の出生数を考えるとあながち不可能ではない様に感じ、取り組み次第と考える。また、同時に図書貸出カードを作って渡していた。6年間貸し出しが無い場合は自動失効と言っていたが、結果として小学生の貸し出し数の増加につながっているとの分析が出ており、網走市での有効期限の設定は認識していないが、真似ることはそこまで大きく費用も発生しない事から、すぐに取り組めるので実行する価値があると考えます。

網走市はエコーセンターという集客性がある程度高いところに図書館があるが、そのメリットを最大化できているか疑問。いかに普段本と接していない人に、図書を親しんでもらうか。エコーセンター利用で来たけど入ってみたい、入ってみようとなる工夫作りを今一度考えるべきと考察した。

## 熊本県荒尾市

**事業名** 商業施設内への荒尾市立図書館の移転整備

### 事業内容

旧図書館の老朽化に伴い、市の中心に位置する商業施設に移転し『本のまち・文化のまちあらお』を目指し整備することで人づくり・まちづくりの促進を図る。

### 説明メモ

炭鉱閉山の影響で炭鉱夫の住宅が空いて利用に困る

そこへショッピングモール整備

そこへ紀伊國屋を連携に入れてはと指定管理者からの提案

図書館運営は指定管理者（紀伊國屋）

新図書の整備への協力（年間の冊数確保が出来るのでWinWinになっている）

反対意見は無く 補正予算で対応

1万冊本を買っている Wi-Fiの整備 システム改修などイニシャルで 約7億

年間1億円の指定管理料 各種込み  
資料記載分 実地検分  
質疑応答 事前通告分より

## 印象と特徴

民間連携により商業施設内の施設整備がボーリング場跡であった為、広いスペースの整備が民間価格で抑えることが出来ていた。

指定管理を紀伊國屋書店が行う事で、本の入れ替えなど書店店員と図書館員の連携がとれている。書店の併設による効果も大きい。

本来目的の他、商業施設という多目的に施設を利用するうちの中にある事による利用増が数字に表れている。複合施設の一つにすることにより相乗効果があり狙い通りの効果になっていた。

デジタル図書については課題であり、図書利用についても多くは60代以上になっている中でデジタルの貸し出しは苦戦との事。小中学校はタブレット端末があり、デジタル図書に関しても小中学生分は貸出数無制限となる契約であり良い傾向との事だが、費用対効果を鑑みるとデジタル図書に踏み切るより紙ベース中心の方が効率的であるとする。筑後市と似た形で小学生には専用の貸し出しIDを渡している。デジタルで同書DL無制限があるとの事で、その影響もあり小学生の貸し出し冊数は多めの傾向との事。

## 網走への活用と方向性

ある程度網走市でも導入可能で、筑後市の様に貸し出しIDを作ってブックスタート時点で渡す又は小学校入学時に渡すのか、効果を考えてやってみるのは導入コストも小さくなく良いと考える。デジタル図書の普及については、当市でもある程度あるがDLフリー契約までする必要性があるかという点、そこまでは現時点で必要性を考えられない。

学力向上にもデジタルより紙ベースの方がいいとの話も出てきている中、まずは紙ベースの中で子供たちが幼少期から本に触れあえるきっかけづくりの1つとなり得るので、積極的な導入検討をすべきと考える。商業施設への移転で利用率の増加に繋がり、民間大手への管理委託により図書と本屋の両立が出来ており良いと思う。網走はコミュニティーセンターとの複合化がされており、複合商業施設ほど多様な選択肢の中に入りこめている訳ではないが、多種のニーズがエコーセンターを利用している中で、センターの利用からついでに図書館とまではなっていない印象。筑後市のレポートにも記載したが、せっかく様々なイベントが開催される場所であるのだから、ニーズの掘り起こしを同時並行で行う工夫を考えるべきと再確認した。

## 熊本県天草市

**事業名** 地域支援事業（高齢者の自主活動 通いの場の推進）

### 事業内容

人口減少に伴う地域団体の衰退や近隣関係の希薄化による高齢者施策の低下に歯止めをかけるため、通いの場を入り口にソーシャルキャピタルの醸成を図る。

### 説明メモ

合併で9万9千人から現在7万1千人

高齢化率が43.3% 全国の20年ほど先をいっている予測値

サービスの供給量を増やすのが難しい中で健康な高齢者を増やす取組

介護予防の通いの場灯籠団体募集 週1回以上をすることが大切

ニーズが金銭的支援よりも リハビリのアドバイス 脳トレなど  
虚弱高齢者が30%減少している  
自分たちで守る 集まる場を作って維持している  
要支援 要介護の人たちの参加は 近所付き合いの中での乗り合いで  
介護タクシーなどの利用までしての参加は無い 補助なし

#### 印象と特徴

天草市は合併の影響もあるが小集落が点在している。その影響もありコミュニティセンターや住民自治会館などがかなり多く、どちらも合わせると100を超えるそうである。

細かく点在しているメリットをうまく生かして事業に繋がっていると認識した。

各住民の自宅からお年寄りが徒歩圏内に集まる場所があり、要介護・要支援は其中でも助け合いで、車の乗り合いで向かうとの事。無報酬で補助や助成も無い。

お年寄りの最初の立ち上げの方の成果発表の映像を見たが、高齢者の継続運動による運動能力の改善の幅の大きさには驚いた。また、立ち上げの高齢者の方はピンピンコロリを目標に、市税は若い人これからの為にこそ使ってほしい。無駄にせず自分たちで出来ることに取り組むという趣旨の発言をしており、楽しそうに語っておられたのが印象的であった。

#### 網走への活用と方向性

網走市への還元を考えると、一番の懸念は継続性である。徒歩圏内にそういう施設の確保が必ずしも出来る状況にはないというのが1つ。また冬季の集合が安易ではないというのがあると考える。今の時代オンラインなどでやろうと思えば出来ない事は無いが、直接会いコミュニケーションをとりながら近況の語り合い、一緒に何かに取り組むというのが一番の生きがいになっており、集まる理由・キッカケづくりになっているのだと推察した。

そういう面でいうと、以前、網走市でも病院で集まり待合室がそのような場になっていたと考える。コロナ渦で不用意な受診の制限が抑制され混雑が解消されたという、よく見えるところではあるが、そうしたコミュニケーションの場の減少を考えると、何か代替のようなものが必要である様に思案するが、送迎といった実負担が生じると思うとどの様にしていくべきかというのは難しい。どこの自治体も同じであるが、健康志向の方というのは積極的になんらかの団体や集まりに所属し活動的であり、問題は出ていかない人・内向的な人をいかに地域と繋げるかという部分である。高齢者の体力向上など解決に向かって稀な例であると感じたが、一方で地域の気候性の違いなどにより、網走へのフィードバックを持ち帰りそのままの再現性が困難な事業であった。改めて本市の問題点を認識する事には繋がった。難しい中でどうやって小さなコミュニティ・高齢者の集まる場をつくっていくかという課題を乗り越える必要がある。

#### 熊本県天草市

##### 事業名 恐竜の島博物館整備事業

##### 事業内容

天草の自然教育の拠点地域である御所浦地域の地域振興につなげるとともに、保護・保全、調査研究・教育活動面での体制整備を図る。

#### 説明メモ

白亜紀資料館がもともとありリニューアル 2000点天草で出土の化石を展示

3,200万のクレヨンしんちゃんコラボ ティラノサウルス展

4,200万の経済効果

海に浮かぶ博物館 天草 上天草市 ●〇市 との3市連携の枠組み

地層学など申請があればバス代など補助 座学と現場を見れる

学術研究も今でも化石の発掘をしている。元々が資料館で博物館ではなく一般の建物の高さくらい。3階建ての3階部分しかなかった。

コミュニティーセンター機能も持っている。（離島の為）

参考資料 記載

## 印象と特徴

学芸員などの専門家による工夫した見せ方が大切。

網走市での類似施設としては流水館・モヨロ貝塚館がある。モヨロ貝塚は学芸員により貝塚の再現など見せ方の工夫がみられるが、天草では恐竜の化石というコンテンツの方が集客性があり強みとなっている。

離島にあり一日の収容人数に限界があり、逆にそのことで資源保全や地域の健全性が保たれているように感じる。リニューアル前は小さく資料館としてお飾りの展示物だったようだが、今回の建設により大きさ的にはモヨロ貝塚より少し小さい程度に感じるが、見せ方の工夫により飽きさせない展示と、説明員が付きやすい状態であり学習の機会となっていた。

## 網走への活用と方向性

網走市への還元を考えると、これは流水館に対してとなるが学芸員や専門家の監修が必須である様に考える。なるほど、と思うような見方や理解は正直無く現状では自然の説明など障りの部分に終始していて、流水の展示以外にもう一度となる要素が正直見当たらない。

今後のリニューアルも考えるとそうした部分を抜本的に見直す必要があると考える。職員を見ても、専門家と呼べる人間は不在でありモヨロ貝塚館と比べると展示の熱量に差がありすぎている。今回の視察全体を通して言える事ではあるが、その事業や物事に対して熱量を持って取り組んでいる人を据えて、しっかりと作り上げていくという工程がどの事業に対しても不可欠である。後天的に熱を帯びることも無い事は無いが、それを学び専門にしている人にある程度一任することによりやってみたかった個人では出来ない事を、様々な視点から面白くする工夫がみられる。本人が楽しく面白い面白くしようとしている事は、周りも楽しめるコンテンツになり得るので引いてはこうした展示施設の観光コンテンツとしての魅力の引き出しを増やすことになるかと考察する。

## 結び

4市の視察を通して、いずれの自治体も共通して「人の熱意」「創意工夫」「地域連携」を核として成果を上げていた。網走市においても、予算措置より先に“目的と熱量”を明確にし、事業の持続性と地域参画を高めていくことが重要であると感じた。